

「なぜ聖霊が必要なのか？」

キリスト教にはクリスマス、イースターと一般にもよく知られた特別な日があります。しかし、これらに比べますとほとんど知られていない大切な日もあります。それがペンテコステであり、今日はそのペンテコステの日曜日です。この日がどれくらい大切かといいますと、この日なくして今日のキリスト教はありえないというほどにこの日はとても大切な日なのです。

ペンテコステとはギリシャ語で数字の5を意味する「ペンタ」と数字の10を意味する「コスト」の組み合わせで成り立っており、それは50を意味します。何が50かといいますと、このペンテコステはモーセがイスラエルの民をエジプトから救い出したことを記念する「過ぎ越しの祭り」の日から50日目が穀物の収穫を感謝する五旬節の日であると同時に、ちょうどその日はイエス・キリストが復活された日からも50日目に当たる日であったためにこの日をペンテコステと呼ぶようになりました。さあ、それではそのペンテコステの日には何が起きたのでしょうか。聖書はエルサレムでキリストの弟子達に起きたことをこう記しています。

1 五旬節の日がきて、みんなの者が一緒に集まっていると、2 突然、激しい風が吹いてきたような音が天から起ってきて、一同がすわっていた家いっばいに響きわたった。3 また、舌のようなものが、炎のように分れて現れ、ひとりびとりの上にとどまった。4 すると、一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した（使徒行伝2章1節－4節）。

この時、イエス・キリストは既に十字架にかかり、復活され、そして天におりました。イエスなき弟子達はエルサレムにとどまっておりました。その彼らの上に聖霊がのぞみ、彼らは聖霊に満たされたのです。聖霊とはまさしく神の霊であり、私達の目には見えませんが、私達のうちに臨み、私達が持ちえない力を私達に与えてくれます。この日に聖霊を受けた者達がイエス・キリストを力強く証するようになり、以降、教会がイスラエルを超えて世界の各地に建てあげられていくのです。この出来事はその時に偶然、起きたことではなく、「やがてこのことが必ず起こるから、あなたたちはこの日を待ち望め」とイエス様はくりかえし弟子達に語られていたのです。

聖書にはイエス・キリストが十字架にかけられ、死んで葬られ、三日目に死人のうちより甦られたと書かれています。そして、この甦られたイエス様が、天に昇られたということが使徒行伝1章には書かれています。その1章9節を見てみますと「こう言い終わると、イエスは彼らの見ている前で天に上げられ、雲に迎えられて、その姿が見えなくなった」という言葉を最後にイエス様は、目に見える形において

は、弟子たちの前に姿をあらわすことはなくなるのです。

そのイエス様が天に昇る前に二つの約束を残して天にのぼられました。すなわち1章5節において「エルサレムから離れないで、かねてわたしから聞いていた父の約束を待っているがよい。すなわち、ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられるであろう」（使徒行伝1章4節、5節）と言われ、8節においては「ただ、聖霊があなたがたに下る時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」（使徒行伝1章8節）と言われました。

これらの二つのイエスの言葉には「～であろう」という言葉が語られています。つまり、それはその時にはまだ起きていないことでしたが、そのことは近い将来に必ず起きるだろうというイエス・キリストの言葉でした。さらにこのイエス様の「であろう」という言葉は使徒行伝のみならず、ヨハネによる福音書においてもイエス様は十字架に架けられる前からご自身の口を通して、繰り返し聖霊があなたがたの上にくるだろうということを語りました。

「わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。それは、真理の御霊である。この世はそれを見ようともせず、知ろうともしないので、それを受けることができない」（ヨハネ14章16節—17節）

「わたしが父のみもとからあなたがたにつかわそうとしている助け主、すなわち、父のみもとから来る真理の御霊が下る時、それは私についてあかしをするであろう」（ヨハネ15章26節）

「しかし、わたしは本当のことをあなたがたに言うが、わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はこないであろう。もしいけば、それをあなたがたにつかわそう。それが来たら、罪と義と裁きについて、世の人の目を開くであろう」（ヨハネ16章7節—8節）

「けれども真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう。それは自分から語るのではなく、その聞くところを語り、きたるべき事をあなたがたに知らせるであろう。御霊は私に栄光を得させるであろう。わたしのものを受けて、それをあなたがたに知らせるからである」（ヨハネ16章13節—15節）

イエス様は繰り返し弟子達に向かって「やがて助け主と呼ばれる聖霊があなたがた

の元に来るであろう」と言われました。その時に、それはまだ起きておりませんでした。イエス様はその日は必ず来るから「聖霊を待ち望みなさい」と語られたのです。そして、これらの言葉の成就が冒頭にお話しした出来事であったのです。

使徒行伝1章3節を見るとイエス様は40日にわたり復活後の姿を度々、弟子たちに現わされたようです。死から復活した者と共に過ごすという、とても考えられないような経験をした弟子たちには、その驚くべき経験さえあれば、イエス・キリストを伝える揺るぎない強い確信が与えられたに違いないと私達は思います。そう、彼らが経験したことはそれほどに強烈な経験です。しかしイエス様は彼らにその経験だけを頼りに世界に出ていくことにストップをかけ、天来の助け主なる聖霊を待ち望むようにと言われたのです。そして、いよいよその約束の聖霊が彼らの上に臨んだのです。

はたして、このようにイエス様が何度も何度も約束なされ、その必要を説いた聖霊がなぜ私達には必要なのでしょうか。今日はこのことを知るために三つのこととお話ししたいと思います。1) キリストの証人となるための聖霊、2) 真理を見分ける聖霊、3) 助け主、慰め主なる聖霊ということを見ていきます。

1) キリストの証人となるための聖霊

使徒行伝1章8節を見ますとイエス様の約束として「ただ、聖霊があなたがたに下る時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となるであろう」と記されています。

イエス様は弟子たちに言われました。「ただ、聖霊が下る時、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となるであろう」。弟子たちは復活のイエス・キリストに出会っていたのです。イエス様と40日もの間、共に過ごしたのです。イエス様が十字架に架けられた直後に比べればまさしくその力100倍、勇気100倍でしょう。

しかし、イエス様は人の情熱の限界を知っていました。イエス様はかつて弟子達に言われていました『心は熱しているが、肉体が弱いのである』(マタイ26章41節)。そうです、特別な経験はしばしば彼らに情熱を与えますが、それはやがて消えていきます。彼らが力を受けて、地の果てにまでキリストの証人になりうる時というのは「ただ、聖霊が彼らに下る時」だとイエス様は言われたのです。熱意と決意によってあなたがたはキリストの証人となるのではない、聖霊があなたの方の上にくる時にのみ、あなたがたは真の力を得て、キリストの証人となりうるのだ、証人となり続けることができるのだということです。

牧師になりまして早いもので21年が経ちました。その間、色々な経験をさせていただけました。経験というのは確かに宝物で、その経験ゆえに対応できることというものが確かにあります。しかし、同時にその経験の限界というものも日々、学んでいます。

牧師の仕事は私達の目に見えないお方を指さし、このところに私達が寄って立つべき人生がありますということを語り続けることです。皆さんの目の前に商品を置いて「さあ、見てください、実際に手にとってみてください」とその商品売り込むようなものではないのです。もし、皆さんが牧師が語る聖書の言葉を通してイエス・キリストを信じる、2000年前にこの地におられたお方の言動を自分自身と関係のあることとして受け入れるのなら、それは人間の業ではありません。そこには聖霊のはたらきがあるのです。

弟子達が「復活のイエスに俺たちは確かに会ったのだ！だから、あなたたちもこのイエスを信じなさい」と力強く、確信をもって話したとしても、その人達がイエス・キリストを信じる保証はないのです。この経験によって弟子達の心に灯った情熱の炎が後、20年、30年と変わらずに弟子達の心にあり続けるということですら危ういのです。ましてやその時から500年、1000年、そして今日のように2000年も経てしましますと、キリストの復活の影響という力が保たれているという事はありえないのです。ですからイエス様は何度も何度も弟子達に言われ、そして私達にも語りかけているのです。「聖霊を受けよ」と。この聖霊を受けて彼らは真にキリストの証人となり、今日もこの聖霊の御業により人々は信仰者となっているのです。

先に読みましたように聖霊が弟子達の上に注がれました時、そこには象徴的なことが起きました。すなわち「突然、激しい風が吹いてきたような音が天から起こってきて、一同が座っていた家いっばいに響き渡った」とそこには書かれており、聖霊というお方を風のようなものと言っているのです。風は目に見えません。どこからきて、どこに行くのかも分かりませんが、私達は風が吹いていった後にその痕跡を見ることができます。そこにあって落ち葉が別のところに動いている。それは風が残した痕跡です。聖霊も私達の目には見えませんが、確かに私達と共にあり、この聖霊のあるところに神の介入があります。そして、この聖霊により頼むことを神は私達に求めておられるのです。私達の力が及ばない、限界と感ずるところにこの聖霊ははたらくのです。二つ目のことです。

2) 真理を見分ける聖霊

この聖霊についてヨハネ16章13節-15節には「真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう」と書かれています。

私達の世界はめまぐるしく動いています。私がアメリカにおりました80年代、日本に電話をかけるということは一大事で、半年ぐらいためこんだクォーターを公衆電話の前に並べて、時間を節約するために言うべきことを箇条書きにして数分間だけ家に電話しました。しかし、今や無料で何時間でも日本にいる家族と話ができるようになりました。いいえ、話だけではなく互いに顔を見ながら話すことができるようになりました。

あらゆる情報がものすごいスピードで世界を駆け巡り、情報収集ということにおいてはもはやどこにいるのかというような地理的なハンディはなくなりました。青森に住む友人にサンディエゴに住んでいながら「九州でさっき地震があったよ」と言いますと、その青森の友人が「え、知らなかった」なんてことがあるのです。

このように無数の情報で満ちている世界にいるということは、その分、選択肢が増えるということで、そうなりますと諸々のことが相対化されていきます。すなわち「あれもよし、これもよし、その人が良ければなんでもよし」ということになります。正しい、正しくないという判断はその人次第という時代です。そして、「その人がよければそれでよかるう」ということを私達は今日、「自由」と呼んでいます。

そんな今の時代、「真理」というような言葉は死語になりつつあります。特に日本ではこの「真理」という言葉をつけたカルト宗教団体が大変なテロ事件を起こし、以来、ますます「真理」という言葉はうさん臭く思われるようになりました。しかし、聖書は変わらず、聖霊は真理が何であるかを明らかにしてくれますと言います。

「真理」などはない。真理は人の数だけある。あなたが正しいと思うことは真理なのだというのはとても魅力的で便利な主張です。しかし、はたしてそうでしょうか。「あなたが正しい」と思うことは本当に正しいのか。各々が自分が正しいと思うことをし始めたらこの世界はどうなっていくのか。もし各々が考えていることが全て真理なら、この世界はとっくの昔によくなっていることでしょう。しかし、現実には各々が掲げる真理の衝突がいたるところで起きています。この世界には何の罪もない人たちの上に爆弾を落としておきながら、自分は真理に従っているのだと人たちがたくさんいるのです。このような人の有様は既に旧約聖書の中でなされており、覚えていらっしゃるでしょうか、聖書の時代の中で最悪の時代の一つと言われている士師の時代がどんな時代であったかを。そう、その時代に「人々はおのこの自分の目に正しいと思うことを行った」（士師記17章6節）と聖書は記しているのです。

この無数の情報が渦巻く世界にあって聖霊は私達に「それは違う」、「そうなのだ、それでいいのだ」ということを示してくださいます。たとえ多くの人が賛同するこ

とであっても、それとは違う道に進むべきなら、そのことを教えてくださるのが聖霊だということです。主にある皆さん、この世界を生きるにあたって私達に本当に不可欠なことはこの聖霊が私達の目を開き、真（まこと）を教えていただくことです。三つ目の事です。

3) 助け主なる聖霊

そして、この聖霊は助け主だということがヨハネ16章7節－8節に記されています。「しかし、わたしは本当のことをあなたがたに言うが、わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はこないであろう。もしいけば、それをあなたがたにつかわそう。それが来たら、罪と義と裁きについて、世の人の目を開くであろう」（ヨハネ16章7節－8節）。

イエス様は十字架にかかれる直前にゲッセマネで祈りを捧げました。その時にイエス様は血が滴るような汗を流して祈られ、その時に『わたしは悲しみのあまり死ぬほどである』（マルコ14章34節）と言われました。それは私達の想像を絶する苦しみです。その時にイエス様を励ましていたのは聖霊です。聖霊は目には見えない。しかし、私達と伴って私達を助け、慰めて下さるのです。「イエスはエルサレムから離れないで、かねてわたしから聞いていた父の約束を待っているがよい」と弟子たちに言われました。イエスはこの弟子たちの前から目には見えない存在となる。今まで、共に歩んでいた師がいなくなる。しかし、その代わりに聖霊があなたたちを慰める、その母がその子を慰めるように、聖霊が私達を慰める。

ある哲学者は言いました。「人間とは単独者だ。たった一人だ」確かにそうかもしれない。人間とは人の間と書くが、実際は一人であります。家族や友人が私達といつも伴っているということにも限界がありませんでしょう。しかし、聖霊はいつも私達共におり、私達を助け、慰め、力づけてくださるのです。

ローマ8章26節にもこう記されているではありませんか！「御霊もまた同じように、弱いわたしたちを助けてくださる。なぜなら、わたしたちはどう祈ったらよいかわからないが、御霊みずから、言葉にあらわせない切なるうめきをもって、わたしたちのためにとりなしてく下さるからである」

ここで聖霊を意味するギリシア語はパラクレートスといい、それは弁護者という意味があります。時に私たちが弱い時、どう祈ったらいいかわからない時に、聖霊ご自身、言葉にあらわせない切なるうめきをもって、わたしたちの代弁者となってとりなしていただくのです。私たちの祈りの弁護者となってくださるのです。たとえ一人を感じる時があったとしても、何かの不安に襲われている時も、聖霊は私

達の慰め主としておられます。

弟子たちの目の前からイエスの姿は見える形ではいなくなりました。しかし、今や場所や時に限定されることはなく、聖霊は常に私たち共にあり、私たちを弁護し、慰めてくださるのです。私たちはこの聖霊と共に生涯歩むことができるのです。

今年のイースターは4月16日でしたから、その日から数えてちょうど50日目の今日はペンテコステの日曜日です。この日がどうして大切な日なのかお分かりいただけたと思います。なぜイエス様が弟子達にエルサレムにとどまり、聖霊を待ち望めと言われたかお分かりになったと思います。この聖霊を私達も必要としております。聖霊は私たちをしてキリストの証人とし、真理を見分けることを可能にしてください、我々を助けてくださるお方なのです。イエス様はこの聖霊がそのようにあまりにも素晴らしいお方であるがゆえに、彼らに何度も、この聖霊について語られたのです。聖霊を受けよと何度も勧められたのです。ですから私達も聖霊を受けましょう。

パウロはこの聖霊によって始まった宣教の力を忘れて、己が力により頼み始めた人々に向かって言いました。『御霊で始めたのに、今になって肉で仕上げるというのか』(ガラテヤ3章3節)。主にある皆さん、思い起こせば私達があの日、あの時にイエス・キリストを信じたということもこの聖霊の力によるのです。聖書に『聖霊によらなければ、だれも「イエスは主である」と言うことができない』(1コリント12章3節)と書かれているとおりです。

私達は各々、今、直面していることに己の力を尽くして向き合っていることでしょう。しかし、いかがでしょうか。聖霊の存在を忘れていることはありませんか。イエス様は弟子たちの情熱、すなわち彼らの肉の力にその宣教の前進を委ねませんでした。そうです、イエス様は彼らが聖霊を受けるまで待つこと、そして、その力によって歩みだすことを強く強く、何度も何度も願われたのです。ですから私達も聖霊と共に、聖霊に導かれて日々を歩んでまいりましょう。お祈りしましょう。